

# 歴史で見る長崎と福建華僑ネットワーク

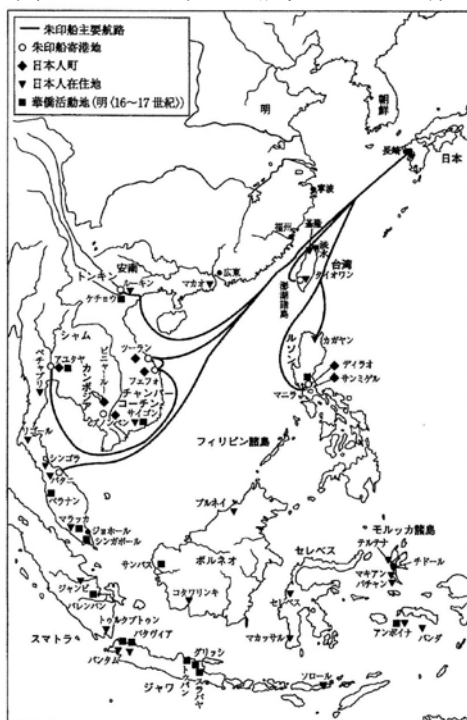
武蔵野美術大学 りょう 廖 せきよう 赤陽

## はじめに. 東アジア海域世界のなかの長崎

2017年度1月から11月の間、長崎に入港したクルーズ客船の数は248隻にも達した。<sup>1</sup> その主な出航地は上海であり、一隻の巨大クルーズに運ばれる客の数は常に4千人を超えている。これらのクルーズの航路により、上海、天津、済州、釜山、鹿児島、八千、博多、大阪、横浜などの東アジア諸港が結ばれた。客船から飛行機に変えれば、上海から長崎までの所要時間は東京から長崎より30分以上

される時空感覚は、むしろ歴史的に長崎とアジアの距離を映し出すものでもある。

朱印船の主要航路及び日本人町の分布図を眺めれば、長崎は日本の中心である江戸から遠く離れているが、むしろ東・東南アジアとの距離が近いということが分かる。しかも、朱印船航路と日本人町は、唐船の航路と唐人町の所在地と重なっていることから、長崎とアジアとのつながりは、アジア通商網の主な担い手である華商と密接な関係を持っているということが示されている。



(図1. 朱印船主要航路)

木村直樹「近世の対外関係」『岩波講座 日本歴史 近世2』岩波書店、2014年、第119頁。

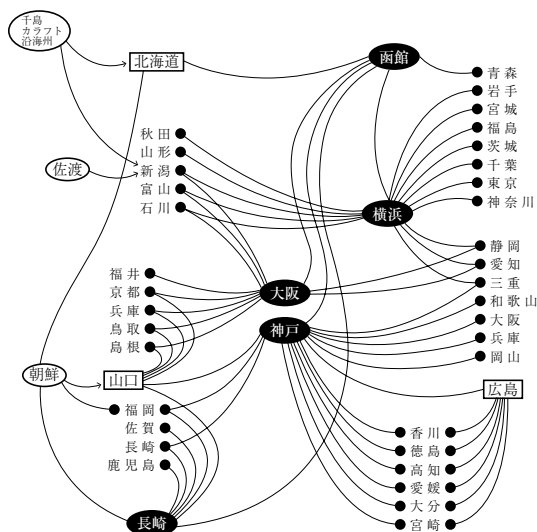
## 一. 長崎の黄金期とその辺境化

### 1. 「鎖国」という長崎の黄金期

歴史的には長崎が本当の黄金期をもたらしたのは他ではなく鎖国という時期であった。しかしいわゆる鎖国とは、主に明治以降形成された一つの時代像に過ぎず、その実態は、同時期における東アジア海域世界の動向を敏感に反応する日本対外関係の展開の中から捉われなければならない。鎖国の時代における日本には、四つの対外交流の窓口が開かれていた。これは、松前を通しての蝦夷地経営貿易、対馬を通しての対朝鮮関係、薩摩を通しての対琉球、中国と東南アジア関係、そして、長崎を通しての中国（東・東南アジア）とオランダ（東南アジア・ヨーロッパ）貿易。<sup>2</sup> これらの窓口を通して、鎖国期における日本対外貿易と文化交流は、質的にも量的にも大きく発展した。鎖国は、幕府による対外貿易管理と独占の一面を有する一方、日本型華夷秩序を意識するものでもある。<sup>3</sup> 17世紀は東アジアの海が波瀾に満ちた時代でもある。明清交代、鄭成功などの海上勢力とのかかわり、キリシタン禁制及びポルトガル、スペイン、イギリス、オランダなどの西洋諸勢力の競合など、大きく揺れ動いた東アジアの海から日本の対外関係に多く問題をもたらし、結局、長崎は唯一の公認された国際貿易港として指定され、唐船とオランダ船を受け入れることが許され、さらに、出島と唐人屋敷という外国人居留地が建設された。このようにして、長崎は対外貿易のみではなく文化交流のセンターにもなった。このようにして、長崎を軸にした一連の鎖国政策によってさまざまな対外関係の難題が整理され、そして、国際情勢の変化により、18世紀に入ると東アジアの海には新たに比較的安定した秩序を迎えることになり、これに従って、長崎もかつてないほどの繁栄を謳歌した。

### 2. 長崎の辺境化と新たなチャレンジ

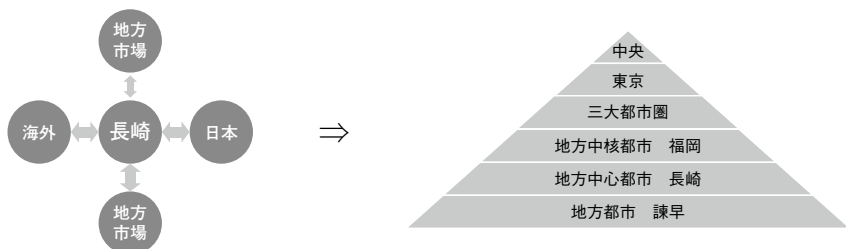
しかし、19世紀に入ると状況はまた一変した。1850年代以来、新たな近代開港に伴って、長崎の歴史地位は厳しい挑戦を受け一つの「地方」と「辺境」に転落した。対外貿易において、神戸・大阪・横浜などの新興開港場の競争に敗れる。明治時代、日本における主な海産品輸出港の買付市場圏を見れば、中心的な地位を持つものは、横浜、大阪と神戸であり、長崎は函館と肩並べて地方市場に止まった。



(図2 明治期の日本における主要海産物買付市場圏)

出典：秋谷重男・黒澤一清『水産貿易構造の数量の研究——日本資本主義と水産貿易』（水産庁、1958年）の関連データにより作成。

同時期以来における日本国民国家形成のプロセスにおいて、都市は外向けの窓口として世界経済と繋がる一環というよりも、内向きの国民経済に組み込まれて、東京を頂点とする中央の対直統合のシステムに従って、順次に国家都市——地方中枢都市——地方中核都市——地方中心都市——地方都市のようなヒエラルキー的な近代国家の都市体系に編入されていくのである。<sup>4</sup> このシステムの中に位置する長崎は地方中心都市に相当し、全国的には東京に一極集中する影響を受けるのみならず、九州地域内でも福岡に一極集中する圧力を受けざるを得なかった。



(図3 近代国家の都市体系のなかの長崎の位置付け)

長崎では、伝統的には造船重機業、水産業、観光業という三大産業がある。1980年代以降、グローバルの波に乗った中央系大企業は次々と海外に進出し、これにより長崎地方への大企業誘致を通して経済を振興する希望が幻滅する一方、国家政策の保護を受けて発展してきた造船などの重工業は、アジア域内の激しい競争に加えて市場の不況に遭遇した。そして、水産業も諫早湾開拓などの環境破壊により深刻な打撃を受けていた。これに加えて、長崎にも他の地域と同様に、少子化、過疎化と高齢化が進む地方経済基盤の沈下という深刻な問題を直面している。こうした流れの中に、観光事業は長崎にとって更なる重要性を持つようになってきた。<sup>5</sup>そして、観光事業の持つ意味は、単に観光客の誘致と観光収入の成長といった経済的効果をはるかに超えて、地域の文化創造とアイデンティティ形成とも深くかわるものである。この動きは、国民国家を相対化し、地方をコアに国境を越えた新たな歴史・文化・生活・政治空間を創出することを意味している。このような「ローカルを主体となって、新しい生活空間を創造しようという運動を『ローカル・イニシアティブ』と呼ぶ」<sup>6</sup> 1990年代以来、長崎では、ランダンフェスティバル（春節祭）などの活動を含めて、当該地方の歴史、社会、文化、自然、産業などに基づく「伝統創造」を積極的に行い、これを通して、歴史的に見られる長崎とアジアとの通商・文化回路の復活と共に、華僑社会と長崎ホスト社会に共通するニュー・エスニシティの形成が見られた。<sup>7</sup>そして、このような新たな伝統創造を可能にしたのは、鎖国以前から始まった長い歴史の中に培われてきた長崎とアジアとの頻繁な移民、経済と文化交流であり、いわゆる福建ネットワークもそのような重要な歴史文化資源の一つである。

### 3. 福建幫華僑と福建ネットワーク

#### 1) 福建幫とは何か

近代以前の長い歴史の中に、華商はアラビア商人とインド商人と共に、アジア域内貿易の広域商圏を築いてきた。華商の形成のプロセスにおいて、出身地域（地縁）に依託することが大きな特色になる。ことに、移民の場合は、国家の保護が期待できない状態のなかに、同じ地域出身・同じ方言を話す人々が一つのグループを作り、同郷会館などの組織を立ちあげて、学校を作り、寺院、神廟や墓地を建設し、特定のビジネス分野に従事するようになった。このような同郷グループは、<sup>ばん</sup>幫と呼ばれる。少なくとも明清の時代から、中国では十大商幫が形成された。<sup>8</sup> 清朝では、著名な地縁グループは山西幫（晋商）、安徽幫（徽商）、寧波幫、福建幫などがある。そのうち、山西幫は金融業に長けて、徽商は全国的なビジネスを展開し、寧波幫は後の江浙財閥につながる。これに比べて、福建幫の最大な

特色は航海、海外貿易及び海外移民である。

## 2) 福建と福建ネットワーク

中国東南沿海の一省。その略称は「閩<sup>みん</sup>」である。清代では台湾も含めたが、1887年台湾省として独立した。台湾人の80%は福建が原籍である。福建省の地理は、「八山一水一分田」と言われるように、耕地は少なく海岸線が長い。歴史的には台湾、海外への移民のセンターの一つとなった。中国では、広東省と並んで二大僑郷（華僑の故郷）と称された。1980年代、福建省は華僑華人及び香港台湾資本を導入し、地域経済発展の活力を蘇らせた。



図4. 福清僑郷の畑



図5. 在日福清華僑林其根の寄付によって僑郷で建てられた学校

福建華僑華人の人数に関する正確な統計はほぼ不可能であるが、1980年代のデータを中心にまとめられた福建省華僑誌によれば、海外福建華僑華人の数は800万人がおり、その90パーセントは東南アジア地域に居住している。なお、省内では帰国華僑と僑眷（華僑華人の親族）は500万人がいる。およそ全省人口の15%を占めている。<sup>9</sup> 別の統計調査によれば、2005年まで、福建華僑華人の総数は1264.62万人に上り、世界の176の国と地域に分布している。なお、1980年代の改革開放以来、数多くの福建人が海外へと移出され、彼らは新移民または新華僑と呼ばれる。2005年までにその数は110.49万人に達した。<sup>10</sup> 従来の移民と異なり、福建移民の多くは欧米などの先進国に向かっており、日本も福建新移民の重要な移出先の一つである。

日本では戦前、福建、広東、三江（江蘇、浙江、江西諸地域）の出身者は三つの最大の幫を構成していたが、現在、中国国籍及び日本国籍所持者を含めて、在日福建人はおよそ8万3千余人がいる。吉林省、黒竜江省に次いで第3位を占めている。<sup>11</sup>

世界各地に移住する福建出身の華僑・華人は、それぞれの居住地で福建会館・

福建同郷会などの組織を作り、1980年代以降、これらの同郷組織の間のネットワーク的なつながりが活性化し、現在、福建華僑華人の団体は1900の組織を超えており、彼らは、世界同郷大会などを開催して、福建ネットワークのグローバル化が進んできた。第1回世界福建同郷懇親大会は1994年にカリフォルニアで開かれてから、2015年までに、マレーシア、泉州、福州、シドニー、ケープタウン、シンガポール、厦門各地で合計八回もの世界福建同郷懇親大会が開かれた。<sup>12</sup> この福建ネットワークは、香港における100万人を超える福建人も含まれており、さらに、同じ方言グループに属す潮州・台湾ネットワークにもつながる。



図6. 第56回旅日福建同郷懇親會長崎大会

日本では、福建人出身者は47都道府県に広く分布しており、1960年代から、56年もの間に続いて毎年一回の福建同郷会の全国懇親大会が開催された。<sup>13</sup> 2016年の11月に、第56回旅日福建同郷大会の開催地は長崎であった。次に、この福建ネットワークと長崎の出会いとかかわりを歴史的に遡ってみる。

## 二. 長崎貿易時期：福建ネットワークと地縁組織

宋代から近代の開港に至って、中国における対外貿易の港は、順次泉州から明州、広州、上海へと移る。福建においては、宋元時代の泉州、明代の月港、清代の厦門という三つの重要な貿易港が相次ぎ隆起した。これらの港は、日本から東南アジア、さらにアラビア海を結ぶ多角的な貿易ネットワークを編み出した。17世紀、鄭氏グループは東南海上の貿易帝国を築き上げ、オランダなどの西洋勢力との競争に優位を占め、日本、中国と南海貿易の利権を握った。18世紀に至って、福建商人は厦門大学貿易ネットワークの主役となり、彼らは、海岸線に沿っていくつもの貿易拠点を作り、省際と国際貿易を行った。その拠点の一つは広州であった。そして、マカオ、マラッカ、ルソンにおいても、彼らは最も優秀な商人集団であった。これらの中継センターを通して、外国貿易船と厦門沿岸貿易ネットワークが結ばれた。厦門より北の沿海諸港において、福建商人は寧波、蘇州、天津などで拠点を作り、同時期における寧波の遠距離貿易と中継貿易の利権を掌握した。これらの港の中継を通して、彼らはさらに、長江と上海航路を繋ぎ、東西を横断する中国奥地の広大な市場と南北に縦断する中国沿岸市場、並びに日本、東南ア

ジアなどの外国市場を有機的に結び付けた。なお、彼らの取引はアジア域内貿易に止まらず、アジア通商網に参入する西洋商人とも深く接触した。<sup>14</sup>

18世紀以降、清朝は厦門－南洋、広東－西洋、寧波－日本という三つの地域を棲み分けにする外国貿易管理政策を実施した。そのいずれの地域にも福建商人の活躍した姿が見える。<sup>15</sup> 19世紀に入ると、福建人の頻繁な海上密貿易により、清朝の沿海コントロール体制が崩壊に瀕し、その秩序を再建する努力はアヘン戦争を惹き起した。このように、西洋インパクトと中国のレスポンスという近代化の図式は、清朝の沿海取り締まりと福建商人の密貿易という極めて地方的な文脈の中に展開される。<sup>16</sup>

会内外における商業移動に従って、福建人の会館、公所組織は港で広く作られた。清末に至って、国内における福建会館は主に広東から東北に至る海岸線沿いに分布した。ことに、江蘇、浙江あたりに集中して。そして、西へは長江から内陸の奥地に入り、東へは台湾に至る。なお、海南や雲南などの辺境にも及んだ。<sup>17</sup> 海外では、福建幫は東南アジアと中心に、ことに、マラヤとフィリピンでは重要な地位を占めた。<sup>18</sup> 福建幫の広域的な地域ネットワークの中に、日本は極めて重要な位置を占めていた。ことに、長崎は福建幫におけるアジア地域内多角通商ネットワークの重要な拠点であった。

長崎の開港は元龜2年（1571）に遡る。ポルトガル船の入港及びイエス会の要求に応じて港を開いた。それより先に、永禄5年（1562）に唐船はすでに長崎に来航したといわれた。「唐船来りし初めは永禄壬戌の年、津の内戸町という浦に到りぬ」。<sup>19</sup> 1635-41年の間、日本はいわゆる鎖国体制を完成した。まさにこの鎖国体制によって長崎は歴史的な黄金期を迎えた。

1686-1707年の間は、長崎に来航する唐船貿易の全盛期であった。毎年平均70隻もの唐船が入港し、主な輸入品は、生糸、絹織物、木綿、茶、漢籍、漢方薬材、雑貨、殺到などであった。輸出品は、初期の金、銀、中期以降の銅などの貴金属、及びナマコ、干シアワビ、鱧鱈などの海産品、そして各色雑貨、手工芸品、伊万里焼などであった。<sup>20</sup> 唐船の主な出航地は安南、シャム、寧波、乍浦、南京、普陀山、福州、泉州、漳州、厦門等が挙げられる。これらの唐船は東・東南アジアの複数の港で往来し多角の貿易を行い、このような形で長崎は朝鮮半島、日本、琉球、中国沿岸ないし東南アジアの広い地域に及ぶ広域的な貿易ネットワークに組み入れられた。<sup>21</sup>

福建幫はその貿易ネットワークに重要な役割を果たした。17世紀入港した唐船のうち、福建船が最も多いのである。17世紀前半、鄭氏グループは日本貿易において大きな影響力を発揮した。18世紀初め、日本は正徳新令を実施に伴って、福

建から長崎に赴く船は減少し、清朝の弁銅商人の官商、額商制の成立に従って、江浙商人の勢力が台頭した。しかし、福建船の来航の減少は、長崎貿易における福建幫の勢力の衰退を意味しているとは限らず、むしろ、航海に携わった彼らは拠点を北へと移り、豊かな航海の経験と技術を頼りにして、江浙に乗り換えて長崎に渡航したのである。<sup>22</sup>

このような貿易と移動の流れの中に、長崎華人社会が形成し始めた。1602年、漳州人欧陽華宇、南京人张吉泉が長崎にわたり、通事雅楽などと共に悟真寺を唐商の菩提寺にすることを申請し、長崎奉行により寺内の土地100間四方の朱印地を与えられ、唐人墓地が作られた。1620年代に入ると、来航唐船の船主により三つの唐寺が相次ぎ作られた。1612年の、幕府はキリシタン禁令を発し、キリスト教の伝今日を厳しく禁止した。唐人たちは自ら仏教徒であり、キリスト教徒ではないことを表明するために、自発的に唐寺を作った。1623年、江浙船主により興福寺が作られ、俗に南京寺と呼ばれた。引き続き、1628年、泉漳船主によって福濟寺が作られ、俗には泉州寺または漳州寺と呼ばれた。翌年、福州の船主は崇福寺を作り、俗に福州寺と呼ばれた。その後、1677年、聖福寺という寺院が建てられ、広東商人とのつながりを以て俗に広州寺と呼ばれた。<sup>23</sup> これらの唐寺は、特定地域出身の唐商と密接な関係を持つため、内田直作はこれを宗教ギルドと呼んでおり、これを日本における華人地縁組織の嚆矢と見られている。

実際、華人の地縁結合は寺廟に委託する形で現れたことは日本だけではなく、東南アジアでは普遍的に見られる現象で去る。そのうち、1673年に建てられたマラッカの青雲亭を除けば、これらの組織のほとんどは19世紀以降成立したものであった。<sup>24</sup> 例え青雲亭のような歴史の最も古い寺廟でも、長崎の唐寺に比べれば半世紀も遅れている。

来航唐人の増加により、幕府は唐人屋敷を建設し、唐人の集中居留地にした。これは、唐館とも呼ばれる。周囲は塀で囲まれ、出入り口には守衛が設けられ、唐人の自由出入りは許されない。唐人屋敷は1688年から場所を選んで建設し始め、翌年唐人を入住させた。<sup>25</sup> 唐人屋敷の建築は幕府による貿易管理政策強化策の一環であり、長崎住民と唐人の間の密貿易を防ぐ狙いがある。新たに作られた唐人屋敷は唐船貿易のセンターとなり、税関の点検、交易のやり取りなどはこの空間で行われ、その近隣地にある新地は貨物貯蔵の倉庫となった。

唐館は在留唐人の社会生活と文化空間でもあった。参入の時期と程度の差があるものの、福建、三江、広東の三つの幫派はいずれも長崎貿易及び唐館の活動に関わり、しかも特定の出身地とつながりを持つ寺院と墓地を持っている。但し、唐館の内には、緩やかな幫派のつながりよりもっと緊密でしかも制度化的な地縁



組織が存在していたのだろうか。内田直作は1898年長崎福建会館修繕の碑記の史料を根拠に、同会館は18世紀末成立したと推定した。その時期に福建会館という組織は存在するか否かはいまだ断言できないが、ただし、その他の史料と参照しながら見っておくと、唐館の内に、福建幫はすでに自らの地縁組織を作り、しかも、これは幫規行約を持つ制度化した組織であることを推論できる。この点については、のちの第五節で詳しく検討を加えたい。

唐館は唐人の文化伝播と保存のセンターでもある。唐人たちは唐館の内に土神堂、天后堂、仙人堂などの振興施設を作り、舞台を立て、音楽戯劇を上演させた。そのうち、唐館の流れを汲む上元蛇踊り、彩舟流、清明祭、菩薩揚げ、媽祖盛会、関帝祭、盂蘭盆会、冬至などの芸能祭祀活動は、今の長崎地域社会に脈々と伝わってきた。<sup>26</sup> 唐館の内の唐人の生活状況についての文字史料は乏しいが、その代わりに、絵画史料、例え絵巻、ことに石崎融思とその弟子の川原慶賀の唐船絵巻、及び各種長崎名勝図絵と当時の人々に好かれた旅行記念品、としての長崎版画、浮世絵などは、唐館の内に在る唐人たちの日常生活と文化伝承をリアル的に記録した。<sup>27</sup>

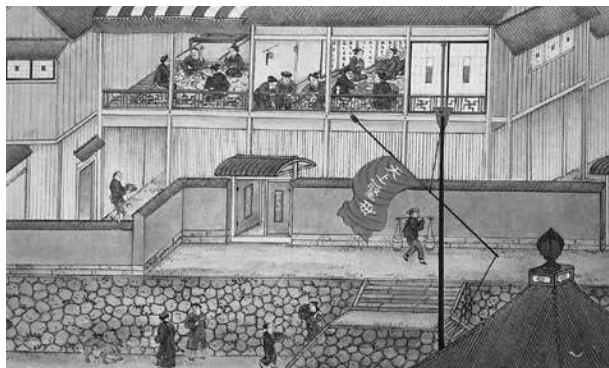


図7. 川原慶賀「唐館之巻」絵巻の第六枚

(史料所在：長崎県歴史文化博物館)

このような背景のもと、隠元禅師は弟子を連れて長崎気渡来し、唐寺での駐在を経て、北へと京都に入り、宇治に黄檗山万福寺を建立し、のちに黄檗宗という日本仏教の一大宗派までに発展した。隠元渡来の後、長崎の唐寺も黄檗系統の寺院になったが、宗派の垂直体制と一定の距離を保っていた。長崎の唐寺は、長い間に唐僧を招いて住職に就かせ、長崎の地域文化に溶け込む一方、華人社会の文化伝承と保存の役割を果たしてきた。仏教の儀式に限らず、道教の儀式も含めて、凡そ唐館のうちの媽祖、土神堂、観音堂などの祭祀活動と葬式などは、いずれも

唐寺の僧侶を中心に行う。崇福寺が奉行所代官への文書には、唐船進出及び唐人死亡の情報を詳しく報告し、同時に、唐館での祭祀活動についても、その活動内容、必要な祭祀用品、儀式の進行順序、そして唐館に連れ入れた人員を詳細に報告した。

「当何日於館内天后堂、土神堂、拙寺相頼、順時祈祷」、「媽祖祭礼何年三月七日七月九月二十三日、三寺順番」<sup>28</sup> これらの報告から、崇福寺は土神堂と媽祖などの道教的祭祀活動を司り、ことに館内天后堂で行われた3月23日の天后聖誕、及び7月と9月の23日、盛大な祭祀活動を行い、この活動は崇福寺、福濟寺、及び興福寺という唐三寺が順番に唐館に出かけて行く。長崎の黄檗系統唐寺による華人文化を担う伝統は今日に至って伝承され、崇福寺の盂蘭盆会もその一例であった。<sup>29</sup>

唐館内の土神堂も唐三寺の管理下に置かれている。「窃向來館中廟宇靈堂自通商啓建以來、列令式百余載、乃供奉香火之所、況土神堂系従前貴国十善寺土神基地、是以此廟適有工作、向帰唐三大寺經理、与日本寺無二、由來五所従未輪及地租」<sup>30</sup> この上呈状から見れば、主に道教系統に属す唐館五廟は、一向唐寺が管理を行う。そのために、日本の寺院と同様に地代を免除する特権を有する。このケースを通して、唐寺は華人社会の文化伝承・維持に果たした役割を伺うことができる。

長い間に、唐寺は中国から唐僧を呼び住職にした。隠元禪師とその弟子たちもこの文脈に沿って渡来し、黄檗文化を日本で開花させたのである。このように、文化ネットワークは商業ネットワークに付随する形で展開され、両者は密接な関係を持つようになっていく。なお、これらの中国文化の日本への伝播は、中国側の積極的な伝播というより、むしろ日本側の主体的な選択である。数多くの舶来書籍は大口の貿易商品として輸入されたものであり、日本市場の需給を反映した。そして、徳川吉宗が出された中国より文人を日本に誘致する指示も、その選択の主体性を反映したものである。<sup>31</sup>

しかし、この時期における日本は中国から文人を召致しようと試みたにもかかわらず、来航唐人のうち、やはり商人と乗組員が大半を示した。いうまでもなく、彼らの内には、文化人、医師と技術者の身分を兼ねている者も数多く含まれており、中国文化の日本への伝播に渡し橋のような役割を果たしており、同時に、今日に至るまでの長崎文化を深く影響した。知られている数少ない人物の事績のうち、彫刻師の方貴峰、医師の化林、潁川入徳（陈明德）、陸文齊、陳振先、朱来章、周歧来、画家の伊孚九、沈南蘋、儒士朱佩章、明清楽を伝わった魏之琰などの名前が挙げられる。そのうち、伊孚九と沈南蘋を除けば、いずれも福建人であ

る。彼らは、殆ど唐船貿易のルートに従って長崎に来航し、彼らの内の多くは自ら商人であった。<sup>32</sup>

通商貿易の進行に伴って、移民と同化も同時に進められた。日本に流れた明人は在宅唐人と呼ばれて、彼らは、日本に帰化する時に、常に出身地を以て自らの日本姓氏にした。17世紀初め、日に増した唐船貿易に対応するために、幕府は在宅唐人の中に、初の唐通事を任命した。その後、通事会館の成立に従ってこのシステムは制度化された。<sup>33</sup> 唐寺が建立する以前からも、唐通事は悟真寺が唐人菩提寺になることに携わって、初の唐人墓地を作り、後に唐三寺とも密接なつながりを持ちながら、唐館貿易を深くかかわった。『訳司統譜』の記録によれば、慶応三年（1867）の通事会館解散に至るまで、任命された唐通事の人数は1644人に達しており、実際の人数も826人がいた。これらの唐通事の前籍地は、いずれも福建と江浙地方であった。そのうち、福建人が最も多いのである。<sup>34</sup> このような大きなグループは、日本社会に同化・融合すると同時に、日本とアジアの交易と文化移動の中に極めて重要な仲介の役割を果たしていた。

以上述べた華商と長崎貿易の時空背景とそれに関連する人・物・事の間を、図3のような図式に整理することができる。

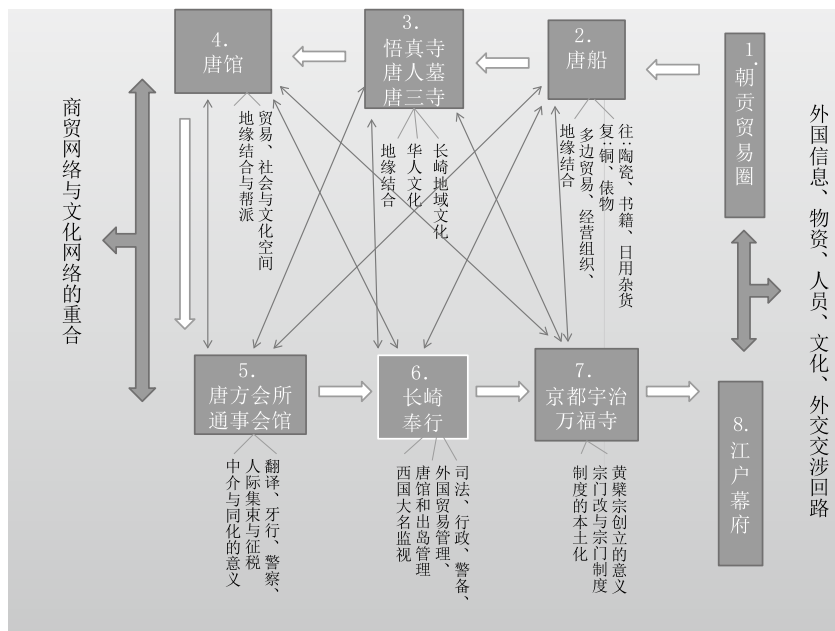


図8. 長崎貿易と華商の関係概念図

図8を1-8へと時計逆回りにして見て見る。

1. まずは、商業貿易と国際秩序の共通する基礎として、東アジア朝貢貿易圏という空間が存在する。
2. これを基礎に唐船貿易が行われた。唐船はアジア域内貿易の伝統商品運び、アジア域内の多角的な貿易を行っていた。唐船は単に交通道具に止まらず、合股に似たような経営組織でもあり、しかも、この経営組織は、地縁結合を基礎としている。
3. 唐船の到来に従って、唐船船主は唐寺を建立した。これらの唐寺は地縁的結合に基づいて、華人文化と長崎地方文化形成と伝承の媒体となった。
4. 貿易商人の増加につれて、幕府は唐人屋敷を建設した。唐人屋敷は商業貿易、社会と文化の三つの空間の結合であった。つまり、長崎貿易の空間のみならず、在留唐人の社会生活空間と文化伝承の空間でもあった。
5. 商取引、移住、文化伝承と同化・融合が交错しながら進んでおり、帰化唐人とその末裔は唐通事となり、唐人貿易の諸事務を司り、近代開港の後、さらに日本の外国語教育と外交の先駆けとなった。
6. 唐館または唐通事は、いずれも長崎奉行の直接管理下に置かれている。「天領」の幕府直轄地として長崎奉行は、行政、司法、警備及び外国貿易の管理者のみならず、西国の諸大名を監視する役割も果たしている。
7. 隠元の上洛、さらに江戸へ赴いて将軍を謁見し、その支持のもとに京都の宇治に規模巨大な黄檗山万福寺を建立し、その後、日本仏教の一大宗派までに発展した。黄檗宗は至る所に中国の明の禅風を残したが、宗門制度そのものは、この新興宗派は制度的に日本化したことを示した。これに比べて、長崎唐寺も黄檗宗に帰するが、相対的な自立性が保たれ、より多くの華人社会文化伝承の機能を発揮した。
8. 長崎上陸してから江戸に辿りつくまで、一連の動きは日本と外国の間における情報、人員、物資、文化と外交交渉の回路を形成され(図2の右側が示した通り)、これを通して、幕府は朝貢貿易圏との安全な距離を保ちながら、貿易の利益や各種必要な文化資源を刈り取ることができたのである。一方、華商もまたこの回路を有効に活用して、商業貿易の拡大と共に文化伝承を行い、そして、遂に商業貿易と社会文化という二つ網を一つのネットワークに結ばれた。(図2の左側が示した通り)

実は、1-8を一本の線に並べれば、丁度日本の一本の中軸線条に位置している。この線は天下統一の象徴である京都を中心に、下りの一端は大阪南部の都市堺市を経過し博多、長崎などの貿易港に至り、さらにキリスト教布教の町平戸、

鳥原、五島と天草などにつながる。上りの一端は東海道五十三次に沿って江戸参り、日本の政治、経済、貿易と対外関係を束ねた。<sup>35</sup>

### 三. 近代開港前後：福建会館とその通商ネットワーク

安政開港以降、日本は1859年に長崎、神戸、函館が諸国に向けて開港することを発表し、それらの開港場に外国人居留地を設置した。翌年には、長崎に入港した最後の三隻の唐船が帰航し、300年近く続いてきた当籤貿易は遂に終止符がうたれた。<sup>36</sup>

しかしながら、開港は同時にアジア、なかんずく中国に向けての開港をも意味している。開港初期に長崎に渡来した西洋人は、長崎港湾建築、産業発展、居留地建設、及び各国の領事館の屋根に翻し外国の国旗などの近代、西洋的な風景に驚嘆を禁じないと同時に、貿易の拡大の大部分は中国人の需用に応じるものであることを気付き、華商の優れた商業能力に注目した。<sup>37</sup>

伝統の唐館貿易が衰退したとはいえ、新興の華商は時代の空気を鋭く掴み、新たに中国の開港場から長崎に進出した。1871年の日清修好条約締結するまで、彼らは無条約国民であるが、条約制度を有効に活用して、西洋商人の付属の身分で合法に進出し、広馬場、新地などの新たな地域で華人集住の地域を形成し、人数と商号の数は西洋商人を大きく上まわった。<sup>38</sup>

これらの新興の華商は、主に広東、福建と江浙辺り出身の商人であった。清末以来、中国国内における会館組織が衰退する際、海外の華僑居留地における華人会館は広く設立された。日本も例外ではない。しかも、開港初期の日本における華人会館は、通常意味での同郷会ではなく、唐船貿易、唐館と唐寺の基礎を受けついで、開港以降の新たな商業貿易活動の展開のために作られた地縁性の貿易商會であった。

これから、前文で提起した福建会館の成立時期のことについて検討を加える。これは、海外におけるもっとも早い時期の福建地縁組織の成立年代と関係するのみならず、日本華人史における連続と断絶の問題ともかかわっている。

内田直作は1897年福建会館重建碑記の次の碑文によって、同会館は18世紀末成立したものと推論した。

「福建会館 八閩会館始建迄今、殆百年之久、為我幫商旅議公之区、良辰宴会之所、由來久矣。乃以風飄雨灑、墻塌棟傾為虞。爰是董事陳君目擊心憂、諗於衆曰、斯館將崩、若緩不修、必墟旦廢、非特失議公之所、而夙供天作聖神宝像爰能安忍哉。於是衆情洽定、務在重新改建為速。所謂一言可以興幫、其斯人之謂歟。因

而募款遐邇、籌策興工、庶茲輪換一新勝旧、巍然壯觀、是亦賴衆幫人踴躍捐貲、俾得其有成也。所有余序另載捐冊、毋庸再述、今替号曰福建会館、以光全省均澤也、且夫業繼前徽、事在人謀、既落成之可嘉、妥為誌之不泯。從此懋遷蕃昌、聚鄉先生於一堂、財源喚發、蒙神佑於無涯、謹序。」<sup>39</sup>

筆者はかつて『八閩会館総簿』巻首に収録された八閩会館条規の「茲我八閩会所創自同治七年」、<sup>40</sup> すなわち同会館は1868年（明治元年）に成立したという史料と照合して、上述の碑文にもう一つの解釈の可能性があるとは指摘した。つまり、「福建会館 八閩会館始建迄今、殆百年之久…乃以風飄雨灑、墻塌棟傾為虞」という文言は、会館所在の建物の建築年代であり、会館組織の成立年代ではないと推論した。<sup>41</sup>

しかし、明治2年（1869）正月、福建会館は日本官庁が実施する「聯保給牌」（在留登録のための籍牌）の要求に応じて提出した報告書には、次のように述べた。唐館内で会館を設立し、鈕春杉と鄭仁瑞が正・副総理と推挙し手日常会務の責任を負う。およそ福建幫に関わること、脱税、犯罪、日本商人との貿易紛糾、在留登録などは、そのいずれも日本官庁は総理に連絡照会しなければならない。同時に「凡閩幫旧規尽行註銷、有事即通知会所総理、照公議新章辦理」<sup>42</sup> これによると、先ず、明治以降の福建会館（八閩会館）の成立は、日本新政府の在留中国人の在留登録と管理のために、新政府に提出した社団登録の時間であり、必ずしも福建会館野成立時間とは限らない。そして、何よりも、新政府に正式登録を提出する以前、福建幫の地縁組織は既に存在しており、しかも会則が存在していた。つまり、それ以前八閩会館という名称の組織が存在するか否かはともかく、福建幫は一つの制度化した地縁組織はきちんと存在していたのである。

明治2年3月、福建会館総理鈕春杉と総管鄭仁瑞連名で明治新政府に提出した報告に次のように述べている。

「謹啓者、所議設立八閩会館於唐館内二十二番聖人館旧基、今欲改建修理、業已估價講定。祈稟管事衙門頭目委員到彼丈量基址、定征地租、以便開工、特此上稟。」<sup>43</sup>

この上稟文に提起した聖人堂は、文政2年（1820）の長崎「長崎諸役所絵図」に描かれている。

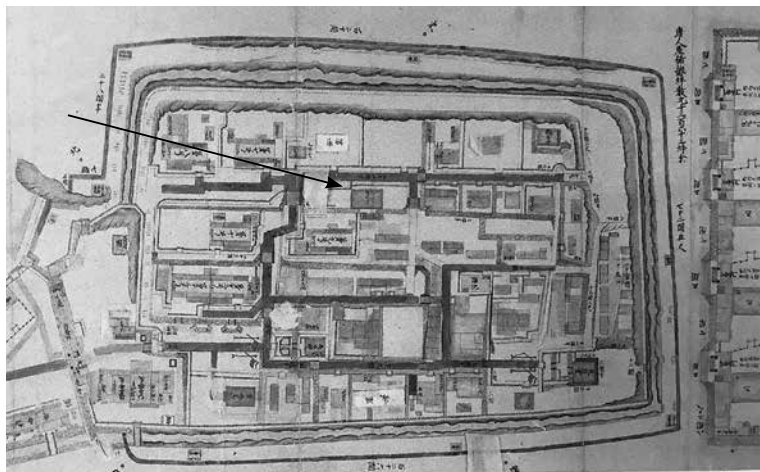


図9. 「長崎諸役所絵図」の中の聖人堂

(出典：長崎歴史文化博物館所蔵)

聖人堂は唐館五廟に非ず、これに関する文字の記録は筆者は未見である。但し、その名称から見ると、孔子と何らかの関連があると推測できる。この場所は、明治2年以來、改築または新築を経て、現在までに保存された長崎福建会館の所在地であった。

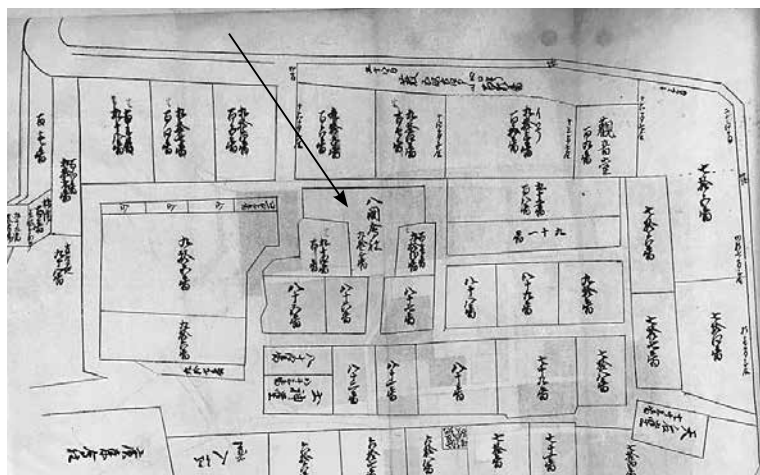


図10. 唐館絵図の中の八閩会社(福建会館)

(出典：吉田家所蔵文書「唐館絵図」、長崎歴史文化博物館所蔵)



吉田家文書所蔵の唐館絵図には、八閩会社と広東会社の所在地をはっきりと記した。そのうち、前者は唐館92番地、すなわち現在の福建会館所在地に在り、後者は唐館の西北部の角にあたり、仙人掌隣の63番地に位置している。いわゆる会社という用語は、もともと日本人がオランダ語のキャンパニーの用語を訳す用語であり、おそらく、絵図の作者は会館を会社と称したのでであろう。ここで描かれたのは、実は明治2年新政府の要求に応じて登録した八閩会館（福建会館）である。<sup>44</sup>

開港以降、広東幫の榮遠堂嶺南会所は同治10年（1871）に成立し、所在地は上図に載せた通りに、即ち新興居留地の広馬場にある。その翌年、三江幫は興福寺内で和衷堂三江会所を作った。<sup>45</sup> そのために、三大幫の会館組織はいずれも明治初年に成立したことから、日本華僑社会は近代以降に始まったものであると断定した研究がある。<sup>46</sup> しかし、現代における僑務政策における華僑定義を以て、国籍法が頒布される以前の長い歴史における商業と移住の歴史を定めることは言うまでもなく妥当性をかけている。八閩会館に限って言えば、新政府の要求に応じる正式に成立する以前、既に唐館内で会則を持つ組織として存在した。そして、新政府に正式登記を行った八閩会館の初代総理鈕春杉は蘇州商人であり、副総理鄭仁瑞は福建長楽の人であった。二人とももともと唐館の総理と総管であった。故に、八閩会館は始めから、唐館の後身の形で現れたものであり、唐館の解体の後、八閩会館は華僑と長崎官庁の事務公所の主な窓口であった。八閩会館が行った初期の華僑在留登録は、福建人のみならず、江浙人ないしそのたの華中、華北出身者も広く含まれている。このような唐館貿易時期に形成された福建幫と三江幫の結合は、開港初期の八閩会館に継承されたのみならず、函館の中華会館にも同様な傾向を示した。<sup>47</sup> 故に、1860年代から70年代初期における日本華僑地縁組織の成立は、近代開港以前における東アジア海域の華商ネットワークと長崎貿易の歴史的持続性、及び近代開港、唐館廃止、在留外国人登録などの明治新政府の諸政策、そして時代的な契機を素早く反応する華商の新たな進出、という持続と変化の二つの側面から捉えなければならない。

海外における福建人が最も多く住んでいる東南アジア地域の状況をみると、マレー半島の方言会館は19世紀以降現れたものであった。シンガポール福建会館所在地の天福宮は1842年に媽祖廟として建てられたもので、少なくとも1860年代から天福宮には福建会館という組織が存在していた。このような東南アジアにおける早期の福建同郷組織に比べても、開港以前既に存在していた長崎福建地縁組織の歴史はとても古いのである。





図11. 長崎福建会館

(出典：筆者)

光緒戊寅年（1878）福建会館は新たに章程を改訂した「議從幫中推挙董事、免開薪俸、雇館丁一名、毎年辛俸登載入冊」その後同会館の董事（会長）を歴任した者は、いずれも福建幫の巨商であった。例えば、王明玉は福興号の行主であり、後に神戸に北上し、府県華商を率いて八閩会館（のちに神戸福建商業會議公所と改名）を設立し、<sup>48</sup> その子の王敬祥は孫文の革命を支持する重要人物であった。<sup>49</sup> 欧陽仁は明治40年成立した長崎中華商務總會の協理（副会長）、<sup>50</sup> 陳発興（国樑）は泰昌号の行主、息子の陳世望は泰益号を創立し、世望の息子の陳金鐘はその事業を継承し、三代続いて福建会館の会長を務めた。

福建会館は貿易商を主とする組織であり、加盟商号を以て会員と為す。幕末明治初頭、商号の数と人数の両方とも三つの幫のトップに立っている。<sup>51</sup> 1888年から1859年の同会館所属商号の変動は表1の通りである。

これらの福建商号の主な貿易地域は、円流通圏の日本、台湾、朝鮮半島、及び中国沿岸、東南アジアなどであり、そのうち、香港とシンガポールのような重要な商業、金融中継センターを含まれている。輸出品は海産品、漢方薬材、雑貨を中心として、輸入品は米穀、豆類、綿花を中心とする。<sup>52</sup> つまり、福建華商は近代以前から始まったアジア域内伝統貿易を行いながら、近代日本の綿紡績業の発展ともつながる。そして、神戸に移住した福建華商は、海産、雑貨などの伝統貿易の他、積極的紡績、ガスなどの近代工業に投資し、さらに、対中国のマッチ輸出を掌握した。<sup>53</sup>

福建会館が貿易商の団体としての特色は、その会費徴収に関する規定にはっきり示されている。

福建会馆作为贸易商团体的特色，鲜明地体现在会费徵收的规定中。「己巳為始公議行号進出貨抽厘，店鋪按四季納費、以充公項而備要需」<sup>54</sup> すなわち、1869～

表1 福建會館歴年登場商號一覽表 (1888-1959)

商號名	活動期間	商號名	活動期間	商號名	活動期間	商號名	活動期間
秦昌	1888-92 (戊子-壬辰)	肇記	1890-1927 (庚寅-丁卯)	承記	1896-1910 (丙申-庚戌)	乾茂	1910 (庚戌)
森茂	1888-94 (戊子-甲午)	萬順	1891-1931 (辛卯-辛未)	大利	1896-1900 (丙申-庚子)	裕源	1910 (庚戌)
怡德	1888-99 (戊子-己亥)	義森	1891 (辛卯)	增記	1896- ( )	三成	1917 (丁巳)
升記	1888-1904 (戊子-甲辰)	義昌	1891 (辛卯)	湧泉	1898 (戌戌)	裕昌	1917 (丁巳)
大記	1888 (戊子)	萬昌	1891 (辛卯)	錦泰	1898 (戌戌)	錦昌	1917 (丁巳)
恒記	1888-1904 (戊子-戊戌)	春興	1891-92 (辛卯-壬辰)	安記	1901 (辛丑)	潘松溪	1917 (丁巳)
和昌	1888-1928 (戊子-戊辰)	永記	1892-1930 (壬辰-庚午)	泰益	1901-1959 (辛丑)		
義記	1888 (戊子)	慶記	1892-1925 (壬辰-乙丑)	太昌	1902-08 (壬寅-戊申)	福興館	1905-06 (乙巳-丙午)
裕和	1888 (戊子)	贈記	1892-1910 (壬辰-庚戌)	裕和晋記	1903 (癸卯)	德隆	1905-07 (乙巳-丁未)
益隆	1888-1901 (戊子-庚戌)	泰錫	1892-1901 (壬辰-辛丑)	合記	1903 (癸卯)	崇記	1917-54 (丁巳-甲午)
德泰	1888-1917 (戊子-丁巳)	震泰	1893-94 (癸巳-甲午)	實記	1903 (癸卯)	振利	1922-28 (壬戌-戊辰)
益盛	1888 (戊子)	福源	1893-94 (癸巳-甲午)	振成	1905-97 (乙巳-丁酉)	公大	1922-30 (壬戌-庚午)
生泰	1888-1959 (戊子-己亥)	福聚順	1893-96 (癸巳-丙申)	四海樓	1905-59 (乙巳-己亥)	三山	1922-44 (壬戌-甲申)
美珍齋	1888-90 (戊子-庚寅)	振泰	1895-1907 (乙未-丁未)	第一樓	1905-10 (乙巳-庚戌)	瑞源	1917-32 (丁巳-壬申)
忠和	1888 (戊子)	震豐	1896-1909 (丙申-丁酉)	福升棧	1907 (丁未)	權記	1922-27 (壬戌-丁卯)
福生	1888 (戊子)	福興	1896-1909 (丙申-丁酉)	裕發	1903-10 (癸卯-庚戌)	永興	1924-59 (甲子-己亥)
盛隆	1888-1907 (戊子-丁未)	福隆	1896-98 (丙申-戊戌)	鼎大	1903-09 (癸卯-乙酉)	泰昌	1931-42 (辛未-壬午)
大興隆	1888-99 (戊子-己亥)	茂隆	1896-1902 (丙申-壬寅)	復元	1903-09 (癸卯-乙酉)	豐泰	
怡和	1888-1904 (戊子-甲辰)	振隆	1896-1910 (丙申-庚戌)	瑞隆	1909 (癸卯)	瑞太	1932-59 (壬申-己亥)
怡泰	1888-1903 (戊子-癸卯)	福泰	1896-1959 (丙申-己亥)	建隆	1910 (庚戌)		

1. 出典:

- ①『福建會館総簿』(1896-1919年、丙申-己未)
- ②『福建聯合会記録』(1917-20年、丁乙-庚申)
- ③『福建会所記録』(1922-38年壬戌-戊寅)
- ④『福建會館総簿』(1939年、己卯年)
- ⑤『福建会所傳單記録』(1933-59年癸酉-己亥)

2. 上掲史料の中、1911-16年、1918-21年の記録が欠如。  
 3. 各商號的並べ順番は、各商號が上掲史料に現れた時期の前後に従う。  
 4. 1931年に新たに現れた泰昌号は、同表の中のものとは異なる商号であり、その経営者は宋勝庸であり、1942年に閉店。

前者は豊泰号と名を異なるが同一商号であり、その経営者は宋勝庸で

1933年までの会則改定に至るまで、同会館の主な日常収入は会費に当たる厘金であった。厘金はさらに定率と定額の二種類に分けられる。前者は各商号の輸出入貨物の原価の千分の一を徴収し、四季ごとに納めて会費と為す。後者は幫内の商号規模の大きさによって、福祿寿の三等に分けて、四季ごとそれぞれ3円、1.5円、0.5円の定額会費を納める。さらに、新入会員は挿炉金と呼ばれる入会金30円を納める。これに比べて、広東会館の会費は毎年銀20両を寄付すると定められ、零細商売を行う者は10両と為す。そして、新加入商号の入会費は25両と定めている。定額会費のみで貿易額に応じた定率の会費が見られない。これは、福建商人が独立商人が多く、広東商人は買弁が多いと関連する可能性がある。

福建会館の厘金収入の変化は図13の通りである。

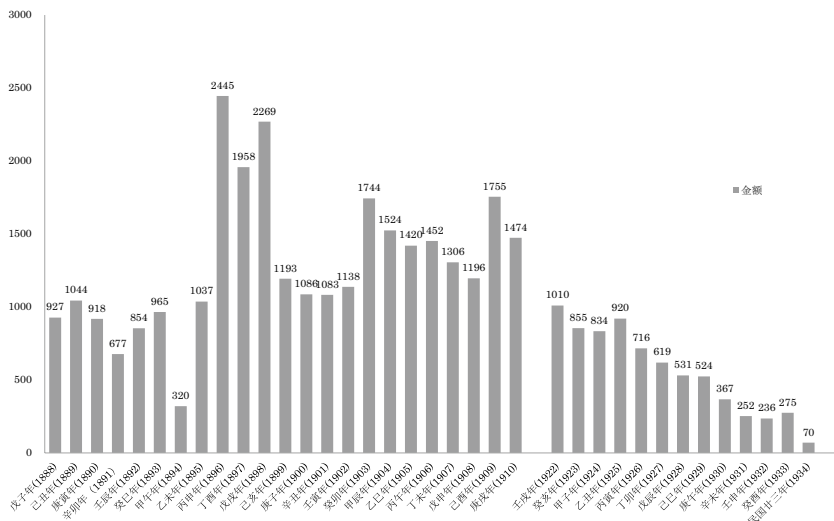


図12. 福建会館歴年厘金変動

図13は福建華商の貿易増減趨勢を示した。日清戦争期の1894年の急下降は、戦争中多くの華商の引き上げと関連する。そして、戦後1896-98年の順調回復は、日本貿易の発展、なかんずく日台経済の密接なつながりと関係している。図13には、1911-21年の間のデータは欠けているが、長崎福建会館を長い間リードしてきた泰益号の関連資料から見れば、第一次世界大戦期は、福建幫華商の貿易の黄金期であった。<sup>56</sup> 1920年代後期から、同会館の収入は右肩下がり、1935年に入ると遂に厘金の収入が無くなった。その背景には、同時期における日本の金融危機、世界恐慌、そして、満州事変以降エスカレートした日貨ボイコット運動の影響が見られる。日中全面戦争勃発した後、各華僑団体は日本外事警察の厳密な監

視下に置かれ、そして、華北偽政権、南京偽政権を支持する長崎新華僑民団に取って代わられた。福建会館の会産も事実上没収され、その組織的活動は中止せざるを得なくなり、<sup>57</sup> 第二次世界大戦の後になってようやく回復したのである。

同会館の会費収入は主に会員貿易額から徴収したのに対し、その主な支出は祭祀活動及び時中学校の運営費に充てられた。<sup>58</sup> つまり、収入の構造は福建会館の地縁性貿易商会である性格を反映しているが、支出の構造から見れば、同会館が単なる貿易商の団体を越えて、華僑教育の維持や文化アイデンティティの伝承などを中心に華僑社会自治組織としての広い機能を果たしていた。会員は商号に限られているにもかかわらず、同会館は福建華僑の親睦、慈善救済、紛糾の調停、福建出身者の規制と統合など行う機関であった。同会館は居留地の行政にも携わっており、そして、長崎官庁との関係においては、日本側から指定された公認の福建幫の代表機関でもあり、およそ各政府の通達や福建出身者と官庁との各種の交渉などはいずれも会館を通して行われた。そして、長崎華僑社会全体に関係する重要な問題に関わると、常に福建、広東、三江という三つの幫派の連署で長崎官庁と交渉する。1907年、長崎中華商務總會（後の長崎中華総商会）は地縁の幫派を越えた包括的な華僑社会の組織であるが、その構成はやはり三つの幫の構成のうえで作られたものであり、三つの会館の総理はそれぞれ総商会の総理と協理を担任し、清朝の農工商部の任命を受けるのである。<sup>59</sup>

福建会館はその他の開港場の福建幫ないしその他の華商との間にも広いネットワークを作った。光緒32年（1906）、福建会館は館内天后堂の修繕に際し、長崎華商の他、神戸、上海、大阪などの華商からも多くの寄付が寄せられた。そのうち、長崎で寄付した商号はいずれも福建幫のものであり、神戸の寄付者は主に神戸福建商業会議公所のメンバーであり、そして、上海の寄付者は主に上海泉漳会館の会員であった。それに対し、横浜と大阪の寄付者は福建商人に限らず、広東幫と北幫が含まれている。<sup>60</sup> なお、上海泉漳会館から送られてきた知らせによれば、上海泉漳会館は上海で同幫華商の委託を受け商品の卸売りを代行し、また、そのために有利な為替手形の決済条件を提供している。また、上海泉漳会館の中に同幫華商のための商品陳列所が設けられており、買主の斡旋や仕入れルート、価格情報と貿易交渉などのサービスをも提供する。このような会館の間のネットワークは、東・東南アジア間の広域的な商業活動に信用保障システムを用意した。例えば、ある福建商人が借金未払いのままで行方不明になった時、泰益号は上海の取引パートナーの徳大号に依頼しその所在を調べた。徳大号は上海泉漳会館に問い合わせた、上海泉漳会館からは、同商人が現在天津におり、天津の同幫会館を通して、同商人に泰益号の意思を伝達することができる、という回答を得た。<sup>61</sup>

近代開港以降、国際貿易を行う大きな幫派は、いち早く開港場に進出し、長崎から北上し、神戸、大阪、横浜、東京、そして函館へと貿易拠点を作った。それに対し、後から来た幫派は、例えば福清幫は開港場の後背地に進出し、<sup>62</sup> 呉服行商などを行って、日本各地に分布した。このような福清行商は、経営、卸売と移民の多重ネットワークをつくり、<sup>63</sup> 1920年代、福清行商人の活動は注目され、単純労働を一貫して禁止する日本政府は、行商人が商人と見られるか否かについて、中国政府との間に交渉を行った。<sup>64</sup>

## 終わりに、蘇る港市ネットワークの力

本文は、江戸時代から近代開港以降にわたる長い歴史時期における福建華僑と長崎とのかかわりを次のような二つの時期に沿って整理してきた。

1. 16世紀末から19世紀中期、長崎貿易を中心とする時期。唐船貿易の進行に伴って、長崎は朝貢貿易圏を基礎とするアジア域内貿易網に編入され、福建人は商人、船乗組員として積極的にこれに参加した。彼らは閩南、閩北系の二つの唐寺を建立し、唐館を拠点に福建幫の地縁組織を作り、自らの貿易、社会と文化空間を構築した。この福建幫が作り上げた貿易ルートに沿って、隠元禅師は弟子たちを連れて長崎に来航し、黄檗文化を広げた。同時期における福建出身者を中心とする唐通事は同化と融合の先駆けとしてアジアと日本の交易と文化交流の仲介的な役割を果たしてきた。

2. 19世紀中期から1940年代中期、新たな華商は開港後の時代的契機を素早く掴んで長崎に進出し、さらに、北へと神戸、大阪、横浜、東京、函館に移動して新たな貿易拠点を作った。彼らは長崎福建会館、神戸商業会議公所などの組織を作り、そして、東・東南アジアの広大な地域における福建華商とも密接なつながりを以て広域的な移民・通商・金融と信用ネットワークを作り上げた。これらの華商は開港以前から行ってきたアジア域内伝統貿易を行いながらも、近代日本の軽工業の発展とも携わってきた。1920年代以来、福清幫の進出も目立つようになり、呉服行商人を主な生業とする彼らは開港場を乗り越えて日本各地に広く分布した。

このような福建幫の動きは、アジア史における持続性、内発性、自律性が示されたと同時に、常に時代のニーズに応えた新たな変化とチャレンジを行うという側面もはっきり示した。そして、20世紀後半から今日に至るまで、中国の改革開放の波に乗って、さらにグローバル的な展開の勢いを見せた。

福建華僑の通商網と文化網は歴史的に長崎で重ねた形で結ばれた。通商貿易の

ルートに沿った形で、黄檗文化も含めて様々な中国文化は長崎に伝わってきた。しかし、これは、中国文化が積極的に長崎に伝播するよりも、むしろ長崎が能動的に選択と受容した結果であった。長崎地域は、日本華僑の社会、文化とそのアイデンティティの形成に向けてかけがえのない場を用意した。そして、このような長い歴史を通して培われてきた華人の移民、通商、貿易、文化、技術の移動と交流のネットワークは、華僑社会、中国、そして長崎地域社会にとって共有できる貴重な公共財と見なすことができる。また、今日の長崎の地域振興にとって、大切な歴史経験と時代の資源でもある。

今日の長崎三大祭りの一つであるランタンフェスティバルの成立も福建ネットワークと深く関わっている。中華街の春節祭から市の一大祭りとしてのランタンフェスティバルに成長することにつれて、福建、台湾、深圳、香港、シンガポールなどの華人世界へと広がるネットワークと長崎地域社会内部の自治組織、半官半民の組織、企業、学校、町内会などの広い社会的連携網が結ばれた。このような形で作られた祭りは「本場の中国文化」と標榜しながら、中国でも日本でも見られない新たな文化を作り上げた。これは、ホスト社会と長崎華僑社会に共有する長崎地域の独自の文化にほかならない。<sup>65</sup> このように、地域独自の歴史資源を生かして、国民国家の相対化を図り、地方をコアに国境を越えた新たな歴史、文化、生活、政治空間を生み出すことは、ローカル・イニシアティブが持つ重要な意味である。

歴史的に見れば、長崎は、港市国家ではないものの、異文明と異文化の出会いの場としてある意味で港市的な性格を持っている。これからも、福建ネットワークをも含めて、多様な歴史資源を活用し、近代的な国民国家の中の一地方都市としてではなく、世界に向けて開かれた港市として、中国、日本、そして世界を幅広く収斂する可能性が秘められていると考えられる。

## 注

- <sup>1</sup> 長崎市ホームページ 「長崎港クルーズ客船入港情報」  
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/kokusai/920000/928000/928010/p025519.html> (2018年1月6日閲覧)
- <sup>2</sup> 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988年。
- <sup>3</sup> 朝尾直弘「鎖国制の成立」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史4 幕藩制社会』東京大学出版会、1970年。
- <sup>4</sup> 野間重元『グローバル時代の地域戦略』ミネルヴァ書房、2000年。中藤康俊『国際化と地域』大明堂、2001年。
- <sup>5</sup> 長崎市観光課浦瀬徹へのインタビュー、2002年2月15日。及び以下を参照：松橋隆司『宝の

- 海を取り戻せ: 諫早湾干拓と有明海の未来』新日本出版社、2008年。麻生潤「東アジア造船業における競争構図の変容と製品セグメント」『アジア経営研究』第19号、19-30頁、2013年。
- <sup>6</sup> 藪野祐三「ローカル・イニシアティブ—国境を越える試み」ちくま新書、1995年。
- <sup>7</sup> 廖亦陽・王維「ローカル・イニシアティブにおける伝統創造——長崎ランダン・フェスティバル（春節祭）とニュー・エスニシティ」『東洋文化研究所紀要』第146冊、2004年12月、第308(45)–285(68)頁。
- <sup>8</sup> 張海鵬・張海瀛主編『中国十大商幫』黄山書社、1993年。
- <sup>9</sup> 福建省地方志編纂委員会編『福建省志・華僑志』福州：福建人民出版社、1992年。
- <sup>10</sup> 張進華「改革開放30年福建新華僑の発展と貢献」『八桂僑刊』2008年12月、第4期、第8-13頁。
- <sup>11</sup> 日本における出身の省別による在留外国人統計が行われたのは、平成24年（2014年）が最後となる。これによると、2014年末に在日福建人は、64028人がいる。同年における在留中国人総数674879人のおよそ10パーセントを占めている。その比率が変わらなければ、2016年末の在留中国人総数は748290人であり、そのうち、福建人はその10パーセントに当たる70431人がいる。なお、1952年から2016年末まで、日本国籍取得した在留中国人の人数は138580人であり、2016年末までの在留中国人の総数のおよそ18.5パーセントに相当する。これらの日本国籍所得者も入れば、2016年度の在留中国人・華人の数は886870人になる。在日福建人の日本国籍取得率は在日中国人の平均値であるとすれば、中国籍所持者及び日本国籍所持者を含めて、2016年末の在日福建人の人数は8万3千人を上ることになる。
- <sup>12</sup> 「歴届世界福建同郷懇親会回顧」閩僑網  
[http://minqw.fjsen.com/2015-08/31/content\\_16564625.html](http://minqw.fjsen.com/2015-08/31/content_16564625.html)（2018年1月12日閲覧）
- <sup>13</sup> 旅日福建同郷懇親会半世紀の歩み編集委員会編『旅日福建同郷懇親会半個世紀の歷程』2013年。
- <sup>14</sup> Billy K.L., *Prosperity, Region, and Institutions in Maritime China: The South Fukien Patten, 956-1368*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Asia Center, 2000. Ng Chin-Keong *Trade and Society: The Amoy Network on the China Coast, 1683-1735*, Singapore: Singapore University Press, 1983.
- <sup>15</sup> 梁嘉彬『広東十三行考』（商務印書館、1937年）によれば、十三行の中に福建出身者は九家を占めていた。
- <sup>16</sup> 村上衛『海の近代中国——福建人の活動とイギリス・清朝』名古屋：名古屋大学出版会、2013年。
- <sup>17</sup> 何炳隸『中国会館史論』台北：学生書局、1966年。
- <sup>18</sup> 吳華『新加坡華族会館志』第一冊、第二冊、シンガポール：南洋学会、1975年。同『馬來西亞華族会館史略』シンガポール：新加坡東南亞研究所、1980年。劉芝田『中菲關係史』台北：正中書局、1969年。
- <sup>19</sup> 西川如見「唐船始入津の事」、『長崎夜話草』第二巻、求林堂、1890年、第7-9頁。
- <sup>20</sup> 永積洋子『唐船輸出品数量一覽1637-1833——復元 唐船貨物改帳・帆船荷物買渡帳』東京：創文社、1987年。
- <sup>21</sup> 參見：山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』東京：吉川弘文館、1964年。中村質『近世長崎貿易史の研究』東京：吉川弘文館、1988年。太田勝也『鎖国時代長崎貿易史の研究』京都：思文閣、1992年。
- <sup>22</sup> 劉序楓「清代前期の福建商人と長崎貿易」『九州大学東洋史論集』第16号、1988年1月、第

133-161頁。

- <sup>23</sup> 長崎市編『長崎市史・地誌部佛寺部』下、1922-24年。
- <sup>24</sup> 今堀誠二『マラヤの華僑社会』東京：アジア経済研究所、1973年。
- <sup>25</sup> 『通航一覽』卷之二百三、唐国総括部六。
- <sup>26</sup> 山本紀綱『長崎唐人屋敷』謙光社、1982年、第280-301頁。唐館の中の社会生活と文化風景については、以下を参照：大庭脩『長崎唐館図集成—近世日中交渉史料集〈6〉』関西大学出版部、2003年。
- <sup>27</sup> 石崎融思『唐館図蘭館図絵巻』、川原慶賀『唐館之巻』、均しく長崎歴史文化博物館に収蔵。
- <sup>28</sup> 崇福寺『唐館始末録』天宝六年（1835）。
- <sup>29</sup> 王維・廖赤陽『在日福清人的社会组织及其網絡——以福建同鄉会的活動為焦點』、劉宏主編『海洋亞洲與華華人世界之互動』シンガポール：華裔館、2007年、第225-238頁。
- <sup>30</sup> 「具呈八閩總理鈕春杉、鄭仁瑞等為懇循例免徵事」『明治二年巳三月以來唐館新地地所貸渡一件自二年至五年居留地所扱』。
- <sup>31</sup> 大庭脩『漢籍輸入の文化史——聖徳太子から吉宗へ』研文出版、1997年。大庭脩『徳川吉宗と康熙帝——鎖国下での日中交流』大修館書店、1999年。王勇『中日書籍之路研究』北京図書館出版社、2003年。
- <sup>32</sup> 廖赤陽「“鎖国”以降の来日外国人・“通商”の国 中国」岩下哲典編『来日外国人人名辞典』東京：東京堂出版、2011年。
- <sup>33</sup> 参见：『譯司統譜』及び宮田安『長崎唐通事論考』長崎：長崎文献社、1979年。
- <sup>34</sup> 参见：宮田安『唐通事家系考』。
- <sup>35</sup> 平戸松浦史料博物館には、平戸藩が1700年に制作された絵巻『東海道並びに船路の絵図』が収蔵されている。同絵巻は、平戸藩主が江戸への「参勤交代」の水陸ルートと各地の距離を克明に記した。平戸から長崎を經過して大阪に入り、京都に赴き、さらに江戸参りのルートは、この中軸線とかなり重合している。
- <sup>36</sup> 劉序楓「近代日本華僑社会的形成——以開港前後（1850-60年代）的長崎為中心」張啓雄主編『東北亜僑社網絡與近代中国』中華民国海外華人研究学会、2002年、第35-69頁。
- <sup>37</sup> 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』福岡：九州大学出版会、1988年、第1-43頁。
- <sup>38</sup> 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』第275-312頁、第725-805頁。同時期における外国人居留地の人口動向について、以下を参照：『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿1-3』長崎縣立長崎図書館、2002年。
- <sup>39</sup> 同碑文は現存しない。内田直作『日本華僑社会の研究』第134頁より引用。句読点は筆者より。
- <sup>40</sup> 「八閩会所規條」、「八閩會館總簿」卷首所收（戊子-辛丑年1888-1901）。
- <sup>41</sup> 廖赤陽「在日華商の社会組織とその商業ネットワーク——長崎福建會館の事例を中心に（1860-1950年代）」『東洋文化研究所紀要』第134冊、1997年3月、第109-173頁。
- <sup>42</sup> 「具呈八閩會所唐商等為遵立聯保給牌議舉頭領統攝本幫事」泰鋸号黄信候等7家閩商連署『從明治元年至同二年 外務課事務簿 支那人往復』所收。
- <sup>43</sup> 「巳三月公司鈕春杉、总管鄭仁瑞上稟」『從明治元年至同二年 外務課事務簿 支那人往復』所收。
- <sup>44</sup> 吉田文書のうちの唐館絵図の年代は不明であるが、明治9年以降のものであると推測できる。
- <sup>45</sup> 内田直作『日本華僑社会研究』第153頁。



- <sup>46</sup> 劉序楓「近代日本華僑社会的形成——以開港前後（1850-60年代）の長崎為中心」
- <sup>47</sup> 斯波義信『函館華僑関係資料集』大阪：大阪大学文学部紀要、第22集、1982年。
- <sup>48</sup> 神戸福建公所理事長黄進勝の回想録によれば、同公所は1897年に成立したものである。吴柏林『福建公所今昔録——財団法人福建会館の創立及其現況』財団法人福建会館事務局、1990年。
- <sup>49</sup> 王柏林、久保純太郎、蔣海波、安井三吉編『“王敬祥関係文書”目録・翻刻』神戸：神戸大学国際文化学部安井三吉研究室、2004年。
- <sup>50</sup> 「農工商部奏長崎華商創商務總會折」『東方雜誌』、1907年第4巻第4期（1907年4月）。「華僑商務彙志」『東方雜誌』、第4巻第9期（1907年9月）。
- <sup>51</sup> 「具呈各帮唐人懇請阿片寬禁令求限制額以甦商困事」慶応4年（1868）辰十月、『從明治元年至同二年 外務課事務簿 支那人往復』所收。
- <sup>52</sup> 泰益号関係書簡、及長崎縣教育會『長崎県人物伝』、1903年、『長崎県案内誌・付実業家名録』（1906年）、第二回関西九府連合水産共進会長崎協賛会『長崎県紀要』1097年。
- <sup>53</sup> 蔣海波「日本華僑と近代中国火柴業」『華僑華人歴史研究』2010年第4期、第14—54頁。
- <sup>54</sup> 「八閩会所規條」。
- <sup>55</sup> 「広東会所各規條」、『從明治元年至同二年 外務課事務簿 支那人往復』所收。
- <sup>56</sup> 廖赤陽「長崎華商『泰益号』交易ネットワークについて：二十世紀前半の厦門貿易を中心として」、『社会経済史学』第59巻第6号、第786—816頁、1994年。
- <sup>57</sup> 『福建会館議事記録』1933年10月18日、『福建会館伝単記録』1936年12月23日、1937年1月23日、9月29日、1938年2月24日、同8月19日、同9月3日、同5日、1940年10月4日。並びに菊池一隆『戦争と華僑』汲古書院、2011年、第131—140頁を参照。
- <sup>58</sup> 『福建会館总簿』各会計勘定欄
- <sup>59</sup> 「農工商部奏長崎華商創設商務總會折」、『東方雜誌』第4巻第4期、光緒三十三年（1907）。『華僑商務彙志』同第9期。
- <sup>60</sup> 『重建碑記』（1906年立）現在長崎館内天后堂に保存されている。
- <sup>61</sup> 『泉漳会馆重訂新章』、中華民國元年（1912）上海泉漳会馆众商公訂。
- <sup>62</sup> 廖赤陽『市場・社会と国家——福清幫ネットワークの形成と日本社会経済の変遷』、神戸華僑総会元会長・神戸中華総商會元會長林同春へのインタビュー、2003年6月21日。
- <sup>63</sup> 張国楽「一九二〇・三十年代における福清呉福行商の実態と動向——「福益号」を通じて」『歴史研究』第44号、2007年3月、第1—34頁。
- <sup>64</sup> 山脇啓造『近代日本と外国人労働者』東京：明石書店、1994年。
- <sup>65</sup> 廖赤陽・王維「ローカル・イニシアティブにおける伝統創造——長崎ランダン・フェスティバル（春節祭）とニュー・エスニシティ」
- <sup>66</sup> 安野真幸『港市論——平戸・長崎・横瀬』日本エディタースクール出版部、1992年。

